

<特別座談会>

外国籍商社パーソンがホンネで語る 日本の職場

—実はこんなこと思っています—



グローバルに事業を展開する商社では、「内なる国際化」も着実に広がりつつあり、外国籍社員が多様な分野で活躍しています。とはいえ、日々の仕事の中では、働き方や就業観、言語・文化の違いから、思わぬすれ違いが生まれることも。今回は、そうした「違い」や「気づき」に焦点を当て、日本で働く外国籍商社パーソン4人に、自身の経験や思いをホンネで語っていただきました。普段はなかなか言葉にされにくい声に耳を傾けることで、多様な人材がより活躍できる職場づくりのヒントになれば幸いです。

座談会参加メンバー（社名五十音順）

兼松株式会社 電子・デバイス部門 半導体装置部 第二課

金 相恩さん（写真：左から2番目）

2024年に新卒で入社。韓国で生まれ、生後3ヵ月から日本で育つ。高校生、大学生で1年間ずつ米国、カナダに留学経験があり、日本語、韓国語、英語の3ヵ国語が話せる。最近運転免許を取得し、ドライブにはまっている。

JFE商事株式会社

鉄鋼貿易本部 ステンレス・特殊鋼材貿易部 棒線・鉄粉貿易室 兼 ステンレス・特殊鋼板貿易室

権 徒輝さん（写真：中央）

2023年に新卒で入社。高校生まで韓国で過ごし、心理学を学ぶため大学から日本へ。大学入試の半年前に日本語をゼロから学び始める。マイブームは新居におしゃれな家電をそろえること。

丸紅株式会社 グローバル総括部 アジア・大洋州課 マネージャー

チョチョ キンさん（写真：右から2番目）

2013年に丸紅ネピドー支店へ入社。MGMPプログラム（Marubeni Global Mobility Program）にて2024年4月より本社勤務。日本語はミャンマーの大学で勉強したが日本への留学経験はなく、今回が初めての長期滞在。ジブリが好きで最近はトトロにはまっている。

三井物産株式会社 金属資源本部 製鋼原料部 合金鉄事業室

エカテリーナ ジュロワさん（写真：一番右）

日本の大学に1年間留学した後、2017年に三井物産モスクワ有限会社に入社。BIP（Business Integration Program）にて2025年3月より本社勤務。運動不足解消のため、オフィスのある大手町から新宿まで歩くことも。

まずは、皆さんが商社で働こうと思った理由を教えてください。

金さん 商社を選んだ理由は2つあります。1つ目は、「グローバルに働ける」ことです。私は韓国で生まれ、米国やカナダで暮らした経験もあるので、そうしたバックグラウンドを活かせる仕事をしたいと思っていました。2つ目は、「事業創出」ができることです。大学生の時に起業をしたことがあり、最終的に廃業という形になりましたが、ビジネスのおもしろさと難しさを感じた経験でした。こ



の経験を活かし、ビジネスの根幹を学びながら、事業創出に挑戦し続けたいと考えて商社に入社しました。

権さん さまざまなプレーヤーを巻き込んでビジネスを生み出していける、これが商社の魅力だと思います。実際に仕事をしていて、これまで接点がなかった人同士をつなぐことで、新たな商売が生まれる瞬間に立ち会えるのがおもしろいです。その中でも鉄鋼業界を選んだのは、日本の高度な産業基盤を学ぶことが、自分にとって財産になると考えたからです。韓国でも鉄鋼産業は発展していますが、より成熟した日本で経験を積むことで、自国に戻ったときにも活かせると思いました。



チョチョさん きっかけは、当時のミャンマーの大統領と経団連が会談をした新聞記事を見たことでした。それを機に、経団連に興味を持ち、最初は日本企業の通訳を目指していましたが、加入企業を調べていく中で「商社」の存在を知りました。当時、縫製工場で働いていた私にとって、グローバルに事業を展開している商社がとても魅力的に映りました。

エカテリーナさん 中学生の頃から、日本に関心があり大学で日本語を勉強しました。先生からはクラス20人のうち2人しか日本語

を使って仕事をできないと言われていましたが、4年間一生懸命勉強した日本語を活かさないもったいないと思い、運よく三井物産モスクワに就職することができました。

日本で就職活動をする中で印象的だった出来事がありますか？

権さん 大学卒業後は韓国へ戻るつもりでしたが、日本での生活を通じて、日本の職場の“丁寧に育ててくれる”雰囲気と安心感を覚えるようになりました。韓国では“まずはやらせてみる”風土なので、自分には日本の方があっていると感じ、日本で就職しようと決めました。そんな中で印象的だったのは、最終面接で不合格になったときの出来事です。結果は残念でしたが、不合格の人にも丁寧にフィードバックをしてくれる姿勢に“日本らしさ”を感じました。

金さん 就職活動中は、反韓感情を持つ面接官に当たったら落とされてしまうだろうという心配が常に頭の片隅にありました。実際には、最近は多くの企業がグローバル人材の獲得に力を入れていることもあって、むしろ外国籍という点がプラスに働いた場面の方が多かった気がします。

実際に日本で働いてみて驚いたことを教えてください。

エカテリーナさん 一番驚いたのは、同僚に「お客さまとの面談ではスーツを着てください」と言われたことです。ロシアには女性がスーツを着る文化があまりなく、日本に来て初めてシャツやジャケットを買いました(笑)。それから、日本語でのメールでは、社内の人にも尊敬語を使うことも、初めはなかなか慣れませんでした。日本の職場で良いなと感じたことの一つに、すれ違いざまに「お疲れさまです」とあいさつをする文化があり

ます。何気ない言葉からも親しみ感じられて良いなと思います。

金さん 私も入社して間もない頃、メールのやり取りで不思議に思ったことがあります。それは、お客さまに対しても社内でも宛先を職位順に並べなければいけないルールです。特にお客さまとのメールでは、返信を重ねるたびに宛先の順番を並べ替える必要があります、ゲームみたいだなと思っています（笑）。こうした細かな“こだわり”は日本ならではのと思いました。

チョチョさん “こだわり”といえば、社内でする感じるのは、書類の文言や言葉遣いへの細かい配慮です。正直「もっと効率的になるのでは…」と思うこともあります。今では私自身もだいぶ慣れてしまいました。ミャンマーのナショナルスタッフからは「日本に染まってきた」と思われているかもしれません（笑）。それから、報告・連絡・相談のスピード感にはとても驚きました。ミャンマーでは、外部会合や懇親会などに参加した後の報告書の提出までに、5日間ほどかかるのが普通でした。でも日本では、その日のうち、遅くとも翌日には報告するのが当たり前。このスピード感は素晴らしいです。

権さん 大学生活を経て、もう日本語は完璧！と思って入社したら、今度は“おじさんビジネス用語”の壁にぶつかりました。「がっちゃんこ」「握る」「ぺらいち」「エイヤ」「鉛筆なめなめ」など、聞き慣れない言葉ばかり…。次はこれらの言葉をマスターすることを目指します！（笑）

社内外のコミュニケーションで苦労したこと、工夫していることはありますか？

金さん 私は日本で育ったので、言葉の面で困ったことはありませんが、外国籍の方と話すときは、なるべく日本語特有の言い回しを

避けて、分かりやすくストレートに伝えるよう意識しています。

エカテリーナさん 曖昧な言葉で言うと、例えば「大丈夫」という言葉は、肯定の意味も否定の意味もあって難しいです。「ごはん食べに行きますか？」に対して同じ「大丈夫です」でも微妙なイントネーションの違いで意味が変わってきますよね。

コミュニケーションでは、私はまず自己紹介の段階から難しいと感じています。ロシアでは名字で呼ばれるのは失礼にあたるのですが、日本では逆に名字で呼ぶのが一般的なので、最初は少し戸惑いました。私の名前は「エカテリーナ」ですが、ロシアでは長いので「カーチャ」と呼ばれることが多いです。でも、日本では「母ちゃん」と聞き間違えられることもあって（笑）、名刺には「エカテリーナ・ジュロワ」と書いているのに、なぜ「カーチャ」と呼ぶのか、毎回説明するのが少し大変です。



チョチョさん 私の部署は海外とのやり取りが多いので、外国の方から声を掛けられることも多く、英語でのコミュニケーションには慣れていますが、一方で、社内で営業部門の人と話すときは、業務知識がまだ十分でないこともあり、話の内容についていけずに苦労す

ることもあります。そうした経験を通じて、言葉だけでなく「相手の背景を理解して話すこと」の大切さを日々感じています。本社で働いてみて、「タテ」と「ヨコ」など商社特有の初めて聞く用語が多くありましたが、先輩に聞くと、みんな手を止めて教えてくれることがとてもありがたかったです。

権さん コミュニケーションでは、相手が気になりそうなところは細かい部分まで事前に確認しておくこと、そして「根回し」をしておくことを意識しています。関係者に事前に情報共有をしておくことで、その後のやり取りがスムーズになります。

自身のバックグラウンドが仕事に活かされたと感じる瞬間はありますか？

チョチョさん 海外の方々と接する機会も多い中で、ナショナルデーや各国の式典などの場でも、特にアジア諸国の方と関わるときに、「ミャンマー出身で日本語を話せる」という点が打ち解けるきっかけになっていけば嬉しいです。

また、現在所属している部署では、海外拠点の駐在員とのやり取りや資料作成など、日本語での正確なコミュニケーションが求められる場面が多く、その点でもミャンマーで日

本語を学んだバックグラウンドが活かされていると感じます。

権さん 入社3年目で兼務になり、韓国のお客さまと関わることが増えました。「はじめてまして」のごあいさつに行くと、相手は当然、日本の会社から来た日本人だと思っていますが、韓国人だと分かると、ぐっと距離が縮まるというか、相手の心が開くのを感じます。そういうときは得しているなと思いますね。

金さん 私は韓国担当ではありませんが、他部署の先輩から「韓国のお客さまとの商談に通訳として同席してほしい」と頼まれ、実際にビジネスに貢献できた経験があります。また、現在は東南アジア地域を担当しており、留学経験を活かし英語でのやり取りにもあまり苦勞はありません。月に一度は海外出張がありますが、異文化での生活経験があるおかげで、文化の違いに戸惑うことも少なく、柔軟に対応できていると感じています。

エカテリーナさん ロシアでは昔から女性がバリバリ働くことは普通のことなので、商社で営業の仕事をするのにハードルは感じませんでした。営業職はハードなことも多いですが、ロシアでの経験から臆することなく意欲的に取り組んでいると感じます。

最後に読者へのメッセージをお願いします！

エカテリーナさん 日本で働く上で、課題の6割は言語、4割は文化の違いにあると感じています。これらはすぐに解決できるものではありませんが、大切なのは“Compromise (歩み寄り)” “Patience (忍耐)” “Acceptance (受容)” の3つの姿勢だと思います。例えば言語の面では、「日本語は難しいから話すのを諦める」「英語しか話せない人を遠ざける」といったことではなく、お互いに歩み寄ることが大切です。文化の面でも同様に、日本の文化に戸惑うことも



ありますが、外国籍社員には、その国で働く以上、受け入れ、粘り強く学ぶ姿勢が求められます。だからといって、100%日本人と同じになることは難しいので、日本人には「ここまで頑張ったからOK」と受け入れる姿勢を持ってもらえるとありがたいです。この3つの姿勢が、多様な背景を持つ人が共に働く上でのカギになると感じています。

チヨチヨさん 人それぞれだと思いますが、私は「フィードバック大歓迎です」ということを伝えたいです。日本人は相手に配慮する気持ちがある分、正直なフィードバックがあまりもらえないと感じることがあります。率直に伝えてもらえれば、自分の改善、スキルアップにつながりますし、それが結果的にチーム全体の成果にもつながると思います。私は普段から、仕事の途中でも自分から課長に報告して、「この進め方で合っていますか？」と確認するようにしています。そうすることで、もし間違っていたとしても早めに軌道修正できるからです。遠慮せずに正直にフィードバックをもらえるととてもありがたいです。

権さん 日本で働くと決めた以上、言語や文化に合わせていく努力は必要だと思います。それは大前提です。ただ、母国語で愚痴を言える家族や友人が身近にいる人と、そうした支えもなく一人で日本に来て働く人とは、**かかる負担が違う**ということも、心にとどめてもらえるとうれしいです。本当は100の力を出せる人でも、日本では80くらいしか力を出せていないこともあるかもしれません。私自身、日本語は問題なく話せますし、周囲の人も日本人と同じように接してくれますが、それでもふとつらいと感じてしまうときもあります。そんな中で、一番うれしかった言葉は「そうだよね」です。自分の考えを言ったときに「そうだよね」と受け止めてもらえ



ると、「自分の想いを聞いてくれた」「自分の考えを素直に話していいんだ」と思えます。自分が言ったことが正しいかどうかは問題ではなく、「そうだよね」の一言には、相手を認めて受け入れる温かさを感じます。

金さん 外国籍社員が入社した際には、言語や文化の違いを乗り越えるために、本人が努力することはもちろんですが、それと同じくらい重要なのが、周囲の社員や会社全体によるサポートです。

最近感じるのは、日本企業にはこの「**受け入れた後の支援**」がまだ十分とはいえないということです。日本独特のルールやビジネスマナーは、日本人にとっては「当たり前」だと省略されることもありますが、**外国籍社員にとっては初めて知ることばかり**です。研修などで一部はカバーされているとはいえ、全てを理解できるとは限りません。

ダイバーシティ採用を掲げる企業は増えてきましたが、採用した後の制度的な支援、継続的なフォロー、文化的ギャップを埋める工夫はまだ不足しています。こうした支援が整えば、外国籍社員にとって日本企業で働くハードルも下がり、安心してキャリアを築いていけるようになるのではないかと思います。

(聞き手:政策業務第三グループ 馬場もも子)